第二九章　天津神の神算鬼謀（二九）

神界の場面は、ガラリ一転した。大八洲彦命は少数の神軍とともに、広大無辺な原野に現われた。そして一隊を引率れ、東へ東へと進軍された。その果しもない原野には身を没するばかりの種々の草が茫々と生え繁っている。その刹那、諸方より火の手があがった。しかも風は非常に強烈な旋風である。天の一方を望めば、常世彦が現われ軍扇をもって数多の魔軍を指揮している。

火は諸方より燃え迫り、煙とともに大八洲彦命の一隊を包んでしまった。ここに大八洲彦命は進退これ谷まり、自分の珍蔵している真澄の珠を、中空にむかって投げつけられた。その珠は中空に爆裂して数十万の星となった。この星は残らず地上に落下して威儀儼然たる数十万の神軍と化した。そうしてその神軍は、一斉に百雷の一度にとどろくごとき巨大なる言霊を発射した。それと同時に、さしも猛烈なる曠野の火焔はぱったり消滅し、丈高き草はことごとく焼き払われた。魔軍の死骸は四方八方に黒焦となって累々と横たわっていた。

それから大八洲彦命の一隊はだんだん東へ向って進んでいった。そこに又もや一つの大きな山が出現している。この山には彼の胸長彦の残党が立て籠もり、再挙を計っていた。

この山を※天保山という。胸長彦はこんどは安熊、高杉別、桃作、虎若、黒姫を部将として、大八洲彦命の一隊を待ち討たむとしていた。このとき真澄の珠より現われたる数十万の軍勢は残らず天へ帰ってしまった。せっかく勢力を得て、勇気百倍せる大八洲彦命は非常に失望落胆して、天にむかい再び神軍の降下せむことを哀願された。折しも天よりは紫雲に打ち乗って容姿端麗な白髪の神使が、二柱の実に美わしい女神をしたがえ大八洲彦命の前にお降りになり、厳かに天津神の命を伝えられた。その命令の意味は、

『大八洲彦命が今度世界の修理固成をなして、国常立大神の神業を奉仕したまう上において、加勢の力を頼むようなことであっては、この神業は到底完全に成功せぬ。それゆえ大八洲彦命の※胆力修錬のため、わざとに神軍を引き上げさせ、孤立無援の地位に立たしめたのは神の深き御仁慈である』

と云いおわり、天の使は掻き消すごとく姿をかくしたもうた。

天保山のはるか東北にあたって※天教山というのがある。そこには※八島別が、天神の命により、大八洲彦命を救援すべく計画されて、あまたの神軍を引率しておられた。

大八洲彦命は今の神使の教示を聞き、もはや天よりの救援隊は、一神も来らぬものと断念されていた。そのために天教山の八島別の軍勢を、わが援軍なりとは少しも気づかず、かえって天保山の別働隊のように思われたのである。

一方胸長彦は、天保山の陣営が強圧さるることを恐れて、いろいろと謀議を凝らした

※天保山……胸長彦の残党が立てこもった山で、天教山の大八洲彦命と対抗したが神の怒にふれて遂に海底に沈み、現今の日本海となった。

※胆力修練……ものに恐れず臆しない気力に、精神や技能をみがき鍛えること。

※天教山……天保山の東北にあり、天保山が水没後、雲表に突出した神山を言う。一名を須弥仙山といい、富士山の別称。

※八島別……天教山の神将で、後に木の花姫神の教えを伝える神として肥の国に降り守護神となる。ついで、建日向別の神と称す。

結果、まず第一に大八洲彦命を偽って帰順し、命とともに八島別の陣営なる天教山を殲滅せむことを企てたのである。そこで胸長彦は安熊、桃作、虎若の三部将を軍使として大八洲彦命の陣営に遣わして、※帰順の意を表し、かつ天教山には大八洲彦命にとって、強敵の現われたことを注進した。

大八洲彦命の陣営は、原野の中心にあって非常に不利な位置であった。もし天教山の上より一斉射撃を受けたならば、大八洲彦命の一隊は、全滅さるる恐れがあったのである。そういう立場に立ちいたれる大八洲彦命は、渡りに船と快諾されてここに和睦をなし、胸長彦とともに天教山を攻撃することとなった。

天教山の方においては、胸長彦の先頭に立ちて攻め来るのを見て、てっきり敵軍に相違なしと思い、山上より大風を起し、岩石を飛ばし、攻めくる敵軍を散々に悩ました。しかも先頭に立った胸長彦の軍隊は、第一戦において殆ど滅亡されてしまった。

その次に第二軍として現われたるは、大八洲彦命の軍勢であった。命は数十羽の烏を使って、天教山なる八島別にたいし、帰順すべく神書を認め、足に括りつけて放たれた。烏は中空高く舞いあがるとともに天教山へ昇り、八島別に伝達した。八島別命はその伝達を読んで、はじめて大八洲彦命の消息を知り、かつ、

『自分は天の命により、大八洲彦命を救援に来たものである』

との信書を書いて、同じく烏の足へ括りつけて放した。烏はにわかに金色の鵄と化り、四方

※帰順……反逆の心を改めて服従すること。

を照しつつ大八洲彦命の前に下ってきた。

ここにおいて始めて相互の真相がわかり、大八洲彦命の軍は歓喜のあまり天にむかって神言を奏上した。

その声は天教山の八島別の陣営に澄みきるごとくに響きわたったので、八島別は山を下らず、そのまま諸軍勢を引き率れ天の一方に姿をかくしてしまった。かくのごとくして敵軍を殲滅せしめたまいし天津神の神算鬼謀は、実に感歎の次第である。

（大正一〇・一〇・二二　旧九・二二　桜井重雄録）

瑞　月

世の中の総ての歎き身に負いて
生れますかと涙しにけり